

技術を磨くための一歩



取得した資格：1級土木施工管理技士
資格取得年度：令和5年度

くろかわ まさひろ
黒川 誠弘*

受験の動機・経緯

私は福岡県に入庁して以来、河川事業や砂防事業などの公共工事の監督員として現場管理の業務に携わっています。入庁から約5年が経過し、現場の流れや施工管理の実務にも少しずつ慣れてきた時期に、1級土木施工管理技士の受験を決意しました。日々の業務では、施工業者や設計業務の受注者等と協議を重ねており、現場経験が豊富な受注者の技術者と対等に話すためには、より広い知識と理解が必要だと強く感じていました。「発注者として受注者と同じ技術的な目線で話せるようになりたい」という思いがきっかけでした。

また、私は学生時代に土木学科を専攻していなかったことから「土木全般を体系的に学びたい」という思いもあり、これも受験への後押しになりました。

第一次検定における傾向と対策

第一次検定は四肢択一問題で、マークシートによる回答となっており、合格には正答率60%以上が必要です。第一次検定は特に出題範囲が広く、コンクリート、河川、道路、砂防、港湾、鉄道など多岐にわたるため、合格するためには多くの事項を覚える必要があります。私は第一次検定対策として、イラストが多く掲載されている参考書を購入し、まず全体的な知識をインプットしました。施工管理、法規や構造等を視覚的に捉えることで全体像を理解できました。その上で、過去問を解き、アウトプット

することで、知識の定着と応用力を身に付けるようにしました。過去問を解く際は、単に正答を選んで終わるのでなく、問題文中の「どこが誤っているのか、なぜ誤っているのか」を分析することに重点を置きました。試験当日も、過去問に類似した問題が多く出題され、文中の誤りを確認しながらスムーズに解答できました。

また、文字だけでは理解しにくい施工手順や工法は、YouTube等の動画も活用しました。構造物を施工している様子を動画で見ることで、実際の施工の流れを視覚的に捉えることができ、理解が深まり、記憶にも残りやすくなりました。

このように、基礎知識のインプットと過去問でのアウトプットを組み合わせることで、短期間で効率的に対策を進めるよう心掛けました。

第二次検定における傾向と対策

第二次検定は、「経験記述問題」と「選択問題」の2つで構成され、第一次検定とは異なり、回答は全て記述式となっています。

経験記述問題では、自身が過去に担当した工事の中から1つの事例（工事）を選び、「品質管理」、「工程管理」、「安全管理」等の中からテーマが1つ指定され、その観点から現場で生じた課題に対してどのように検討して、どのように対応したか、その結果はどうだったのかを記述します。

私は、過去に担当した工事の中で特に印象に残っ

*福岡県 県土整備部 砂防課 主任技師

ていた工事を1件選び、頻出テーマに関する文章を事前に準備しました。発注者側の監督職員の立場から、現場で対応した内容をテーマに沿ってまとめる必要がありました。試験対策のテキストには数多くの例文がありますが、ほとんどが施工者側の現場監督員向けで、発注者の立場で記述された例は少ないです。そのため、テキストを参考にしつつ、自分の経験を整理して、文章を作成するのに時間を要しました。

文章の準備で特に心掛けたことは、土木の専門知識がない人が読んでも伝わる文章にすることでした。作成した文章を家族にも読んでもらい、わかりづらい点を指摘してもらいました。これにより、自分の工事の監督職員としての対応について省み、今後の課題について考える良い機会となりました。

一方、選択問題は第一次検定で学習した内容が出題されますが、四択ではなく、自分で文章を記述して答えます。選択問題の内容は第一次検定の内容を深掘りした内容ですが、「問題文を読んで、回答を自分で記述する」必要があります。日常業務ではパソコンでの作業が中心で、手書きで文字を書く機会が少なくなっていました。以前は迷わずに書けていた漢字がすぐに書けない状態でした。試験対策をする中で、テキストで用語や回答を確認して覚えるだけでなく、実際に自分で書いてみるのが大切だと感じました。今後は日常業務でも、文字や文章を書く機会を意識して増やそうと考えています。

資格取得後の変化

資格取得によって、給与や業務内容が大きく変わるわけではありません。しかし、試験勉強を通じて得た知識や経験が整理され、自分の判断や説明に少しずつ自信を持てるようになったことは大きな変化でした。また、受注者の考え方や現場の工夫を理解できるようになり、打合せや現場確認の場でも自信を持って技術的な議論に臨めるようになったと感じています。

さらに、試験勉強を通じて、土木全般の知識を体系的に学ぶことができたことは大きな収穫でした。日常業務では経験しない分野の知識、法規や施工管理の考え方を整理できたことで、技術者としての基盤を少しでも広げることができたのではないかと実感しています。

おわりに

私にとって1級土木施工管理技士の勉強は、自分の技術や知識を高める絶好の機会でした。資格はゴールではなく、新たなスタートとなっています。これからも発注者として、現場で汗を流す技術者の方々と、より良い工事をつくっていけるよう努力を続けていきたいと思えます。

もしこの体験記を読んでいる方の中に、資格取得を迷われている方がいたら、是非挑戦してみてください。勉強の過程そのものが力になり、自信を持って現場に向き合えるようになるはずです。本稿が、これから受験を考えている方々の参考になれば幸いです。

【著者紹介】黒川 誠弘（くろかわ まさひろ）

平成30年福岡県入庁(土木職)。福岡県朝倉県土整備事務所災害事業センターで河川・砂防の災害復旧事業等の職務を経て、令和5年より現職。

出題 石田 和雄 九段

詰将棋

9	8	7	6	5	4	3	2	1
						王		と
				糸				
				歩			飛	
						銀	糸	

▲先手
持駒 2
金銀

〔ヒント〕
挟み撃ちにする

〔あなたの棋力は？〕
5分……………1級
10分……………初段
(解答は80頁)

